

# 被爆72周年原水爆禁止世界大会



東京都大田区蒲田  
5の10の2  
**全日本港湾労働組合機関紙**  
(毎月1日発行)  
一部20円 (組合員の購読料は組合費の中に含む)  
発行責任者  
真島勝重



ヒロシマ大会・日・米で情報公開に違い

八月四日から六日にかけて大阪支部から四名で原水禁広島大会に参加しました。初日は、核廃絶を願う折鶴平和行進から始まり広島平和公園から県立総合体育館(クリーナアリーナ)までの約一キロの道のりを貫徹した後、日本全国や海外から二七〇〇名の参加者のもと開催された「被爆七十二周年原水爆禁止世界大会・広島大会開会総会」に参加しました。

二日目は、各会場に別れ分科会が開催され、午前中は「平和と核軍縮一憲法・沖縄・いまこそ武力にたよらない平和構築へ」に参加、午後からは「基地問題交流会」に参加しました。

分科会で興味深い内容として日本とアメリカの情報公開法の違いについてです。南スエーデンの陸自「日報」をめぐる問題で政府の隠蔽体質が浮き彫りになりました。

アメリカの情報公開法の前提となる認識は、政府、及び政府の所有する情報は人民に属する、政府が持つ情報についての政府の機能は、社会に奉仕する保管者という機能であり、見せない理由があるときは、理由を説明しなければなりません。また、艦船の航海日誌は永久保存でありほとんどが公開される。なお、日本の情報公開法においては、原則公開の原理がなく、異議申し立ての制度が機能していない、さらに艦船の航海日誌に至ってはテロの標的になり、自衛隊の行動パターンがわかり敵が利するという理由でほとんど公開されていません。

最近になって特に考えさせられる政府の都合で使分けられる国際基準、PKO派遣、戦争法や集団的自衛権行使の場面での国際協力、パレルモ条約批准のための共謀罪と言っておきながら、一方では国連の核兵器禁止条約会議、我々労働者に関係するILO国際労働基準での批准に

使の場面での国際協力、パレルモ条約批准のための共謀罪と言っておきながら、一方では国連の核兵器禁止条約会議、我々労働者に関係するILO国際労働基準での批准に

使の場面での国際協力、パレルモ条約批准のための共謀罪と言っておきながら、一方では国連の核兵器禁止条約会議、我々労働者に関係するILO国際労働基準での批准に

使の場面での国際協力、パレルモ条約批准のための共謀罪と言っておきながら、一方では国連の核兵器禁止条約会議、我々労働者に関係するILO国際労働基準での批准に



この間、安倍政権が暴走し、集団的自衛権行使容認の憲法解釈による戦争法制の強行採決しようとしたときには、全国での時限ストライキを二〇一五年第八六回定期全国大会で決定し、たたかってきた。共謀罪にたいしても、全国で抗議行動を展開した。追い詰められた安倍政権労働組合のたたかいは大きくは広がらず、多くの市民、国民の反対の中で、戦争法制、共謀罪などの法案は成立した。たたかいが無駄に終わ



ったのではないかという声もある。しかし、このたたかいは、安倍政権の腐敗を追求する基礎となったのである。

一強ともいわれる高支持率の中で、おされる安倍政権は、森友問題、加計問題など政治を私物化してきたことが

労働者と市民のたたかいはきつかけとした動きは、森友問題、加計問題などのごまかしを許さず、安倍政権の不正をあぶりだしてきている。

今、安倍政権は、大きく支持率を下げている。

戦争も人権も

安倍政権ほど、国民を愚弄し、子供だましの様なごまかしを続けている政権はない。「働き方改革」や「派遣をなくす」、「同一労働同一賃金」など働く環境が改善されるような言葉を並べているが、実際の政策は真逆である。

「働き方改革」といっても、



七日に採択され初めての原爆の日をむかえ、八月七日から九日被爆七十二周年原水爆禁止世界大会・長崎大会が開催されました。

大会では、広島に原爆投下の二日後の一九四五年八月九日午前十一時二分、長崎に原爆が投下され、一瞬にして七万四千人の尊い命を奪い死の街と化した時から七二年間、核被爆者が立ち上がり長年積み重ねてきた努力が実を結ぶ形となり、「兵器禁止条約」

とに、復活してきた。復活させた要因の一つに、労働組合の政治闘争が弱いためといわれていることも否定できない。働く者の要求や政策をまとめる団体が労働組合であるが、近年労働組合の旗が見えない、存在感が薄いなどといわれてきた。労働組合の政治闘争が弱く働く者の声の形になってこなかったのではな

いだろうか。

青年運動が突破のカギ

国民の大多数を占める労働者労働者の生活がよくなるなければ社会はよくなる。一部の者だけが富をむさぼり、豊かなものはもったいない。青年の力が重要だ。青年が自分の人生を大切にすることは、政治に無関心ではありえない。

全港湾が青年運動の強化する方針を重視しているのは、たたかいが今だけのものではなく、未来につながるものではないからだ。青年労働者の奮闘を期待するとともに、各地方・支部が青年の主体的活動を、せひ、支えてほしい。

## 主・張

### いま政治はどうなる

中央執行委員長 松本耕三

全港湾の政治闘争

全港湾の運動は、港湾産業別闘争の強化であり、たたかう労働運動の発展を通して、汗して働く者が報われる社会づくりを目指したたたかいである。企業内における労働条件要求のたたかいは当然だが、企業内運動に埋没しない運動をすすめてきている。

この間、安倍政権が暴走し、集団的自衛権行使容認の憲法解釈による戦争法制の強行採決しようとしたときには、全国での時限ストライキを二〇一五年第八六回定期全国大会で決定し、たたかってきた。共謀罪にたいしても、全国で抗議行動を展開した。追い詰められた安倍政権労働組合のたたかいは大きくは広がらず、多くの市民、国民の反対の中で、戦争法制、共謀罪などの法案は成立した。たたかいが無駄に終わ

表面化し、政治問題となってきた。安倍首相の任命する閣僚は、自分たちのお友達で占めてきたが、稲田防衛、金田法相などの無能さへの国民の批判が噴出した。独裁的な力とさえ言われた安倍政権が、いま、追い詰められている。

労働者と市民のたたかいはきつかけとした動きは、森友問題、加計問題などのごまかしを許さず、安倍政権の不正をあぶりだしてきている。

今、安倍政権は、大きく支持率を下げている。

戦争も人権も

安倍政権ほど、国民を愚弄し、子供だましの様なごまかしを続けている政権はない。「働き方改革」や「派遣をなくす」、「同一労働同一賃金」など働く環境が改善されるような言葉を並べているが、実際の政策は真逆である。

「働き方改革」といっても、

七日に採択され初めての原爆の日をむかえ、八月七日から九日被爆七十二周年原水爆禁止世界大会・長崎大会が開催されました。

大会では、広島に原爆投下の二日後の一九四五年八月九日午前十一時二分、長崎に原爆が投下され、一瞬にして七万四千人の尊い命を奪い死の街と化した時から七二年間、核被爆者が立ち上がり長年積み重ねてきた努力が実を結ぶ形となり、「兵器禁止条約」

とに、復活してきた。復活させた要因の一つに、労働組合の政治闘争が弱いためといわれていることも否定できない。働く者の要求や政策をまとめる団体が労働組合であるが、近年労働組合の旗が見えない、存在感が薄いなどといわれてきた。労働組合の政治闘争が弱く働く者の声の形になってこなかったのではな

いだろうか。

青年運動が突破のカギ

国民の大多数を占める労働者労働者の生活がよくなるなければ社会はよくなる。一部の者だけが富をむさぼり、豊かなものはもったいない。青年の力が重要だ。青年が自分の人生を大切にすることは、政治に無関心ではありえない。

全港湾が青年運動の強化する方針を重視しているのは、たたかいが今だけのものではなく、未来につながるものではないからだ。青年労働者の奮闘を期待するとともに、各地方・支部が青年の主体的活動を、せひ、支えてほしい。

政治の変革は粘り強く、持続した取り組みが必要である。今だけの問題ではなく、これから未来につながるものではないから未来にない。そのためにも、青年の力が重要だ。青年が自分の人生を大切にすることは、政治に無関心ではありえない。

全港湾が青年運動の強化する方針を重視しているのは、たたかいが今だけのものではなく、未来につながるものではないからだ。青年労働者の奮闘を期待するとともに、各地方・支部が青年の主体的活動を、せひ、支えてほしい。

(一面からの続き)

させました。もちろん、アメリカ・ロシア・中国など核保有国や「核の傘」のもとにある「核の同盟国」は参加していません。

そして、核兵器は今もなお世界に一五、〇〇発以上も現存しており、その大半がアメリカとロシアが保有しているのが実態です。日本政府は、アメリカの核の傘に依存する政策を見直し「唯一の戦争被



爆国」として、「核兵器禁止条約」に参加し、核廃絶に向けて先頭に立ち、核保有国に働きかけ核兵器の廃絶に力を注ぐべきです。私は、核兵器は国境も関係なく無差別に命を奪い、環境を破壊する、非人道的な悪魔の兵器であり、人間と核兵器は共存できないことを痛感しました。

被爆者は、後世の人々が生き地獄を体験しないよう「再声を受け継ぎ後世に風化させることなくどげなくてはならない」と思います。戦争の記憶を、直接聞くことには、時間が限られるこの現状の中で、どのようにして戦争の悲惨さを若い戦争の知らない世代に伝えていくかが今後の課題だと思えました。私たちは、歴史を学び、その教訓を活かさなければならぬ。戦争は、

二度としてはならない。善良な人の心まで変えてしまうからです。

再び被爆者をつくらないためにも、日本が最初で最後の「戦争被爆国」になるように、核兵器廃絶を強く求めな

被爆者の高齢化が進み平均年齢は八十一歳となり、被爆者の生の声を聴くことが近い日にできなくなります。声なき声を受け継ぎ後世に風化させられないと思えます。戦争の記憶を、直接聞くことには、時間が限られるこの現状の中で、どのようにして戦争の悲惨さを若い戦争の知らない世代に伝えていくかが今後の課題だと思えました。私たちは、歴史を学び、その教訓を活かさなければならぬ。戦争は、



の中、十一時二分、爆心地公園の慰霊塔で黙とうをしました。(九州地方関門支部 今村なおみ)

フクシマ大会：くり返す原発震災！めざそう脱原発社会！

七月二十九日に福島市の福島県教育会館で行われた、被爆七十二周年原水爆禁止世界大会・福島大会に参加しまし

た。二〇一二年三月十一日の東日本大震災で福島第一原発の事故から約六年四月が経ち、廃炉に向けた作業がままならない中で未だに約八万人の人達が避難生活を余儀なくされています。そうした状況で福島大会が開かれ「核も戦争もない平和な二一世紀に！くり返す原発震災！めざそ

う脱原発社会！」をメインスローガンとし、講演会や高校生平和大使による訴え、福島からの訴えなど核兵器廃絶、脱原発の話がされました。広島・長崎・福島の被害に遭われた方々に黙祷が捧げられ、大会副実行委員長の西尾漢さんから挨拶があり、安倍政権の原発再稼働の方針を批判し大会で議論しようという

講演会では講師として弁護士の海渡雄一さんから「原発事故の責任と再稼働をめぐる司法の現状と課題」について講演して頂き、「全国で行われている原発再稼働停止の運動や、仮処分申し立てで勝てば原発再稼働を止められる。また、原発事故は国や東電の責任だと司法に訴えるたか



防ぐことは司法の責任。政府の司法への介入を許すな」と講演されていました。高校生平和大使の方は、原発事故が起きて今までと同じ生活が出来なくなり、そうした辛い思いをするのは自分たちの時代で終わりにしましう。核兵器を廃絶しましうと訴えていました。

福島から訴えを、双葉地方原発反対同盟の石丸小四郎代表が福島とその近頃の現状と東電の管理体制を説明し、

爆関係者に無念さをもたらすという理由だ。つまり、米国の核の傘がなくなったら、攻められるという論法を繰り返してはいけないというメッセージを訴えかける平和を踏みにする行動であった。核兵器保有国は当然、条約交渉自体に当初より反対の立場を明確にしている。日本も米国の核の傘に依存しているため、追従しているのだらう。条約に参加させるためには、当然、今以上の核兵器廃絶に対する国民世論の声が必要になってくる。日本政府の核兵器禁止条約の主な反対理由は、核廃絶するためには、人道的問題と一つ、安全保障の両輪が必要、安全保障に対する認識が全く欠落して



「事故は未だ終わっていない。二度と繰り返してはならない」と訴えていました。今回の原水禁・福島大会に参加して、第二のフクシマを作らないたいかいを続けていかなければならないと感じました。東電は津波の対策をとる方針を決めていながら、経済的な理由で津波対策を放棄して事故を招きました。原発再稼働に反対する世論は賛成する世論の倍となっていて、

いたことなどを踏まえ、さらには、非核三原則を守り、核なき世界の実現を目指してまいる所存でございます、あれから一年も経っていないのに、あの答弁は何だったのか、その場しのぎの国会における虚偽答弁ではないか。北東アジアの非核化については、朝鮮半島を中心とする平和的、相互的、包括的な議論が必要である。いずれにせよ、日本は核兵器禁止条約に参加すべき立場であることを報道機関はもっと訴えかけるべきである。



# 反原発・反核への思い 巻原発反対闘争勝利から見えてくる諦めない闘いの歴史

書記長 真島勝重

被爆七十二周年原水爆禁止世

界大会・長崎大会へ参加した。開会式で特に印象に残る発言があった。高校生平和大使が壇上で「私たちは微力だが、無力ではない」、そう言って原水爆禁止を会場参加者に、日本国民に、世界に訴えかけていた。原発事故を繰り返してはならない、脱原発社会を目指す」と若者が訴えている。

核も戦争もない平和な二一世紀に！そんな当たり前のことを、最近、日本国民が無関心になってきている。自分は原爆の被害を受けた方と接したことがないから、実際に近くに原発がないから、自分から遠い世界の話、思考停止に陥っているのかもしれない。もしも、身近に原発や軍事基地があれば、YESかNOで

きつと考える。実際に七二年前に東京や国内主要都市では大空襲に見舞われ、沖縄では一般市民が多数犠牲となる地上戦が繰り返され、広島に長崎に原爆が投下され、敗北をもつて二度と戦争は繰り返さないことが語り継がれてきたはずである。日本は敗北によって、平和と民主主義による新たに戦争の歴史を繰り返

さないと立ち上がったはずであった。核の脅威、原爆の悲惨さを一番知っている日本であるがゆえに原水爆禁止を世界に訴える責任が政府にあるはずである。この情勢によるものか定かでないが、二〇一四年から三年連続で、高校生平和大使の代表団が日本政府代表団に一時的に加わり、軍縮会議でスピーチを行ってきたが、特例的に認められていた発言を問題視する国が出たため今年のスピーチは見送られた。



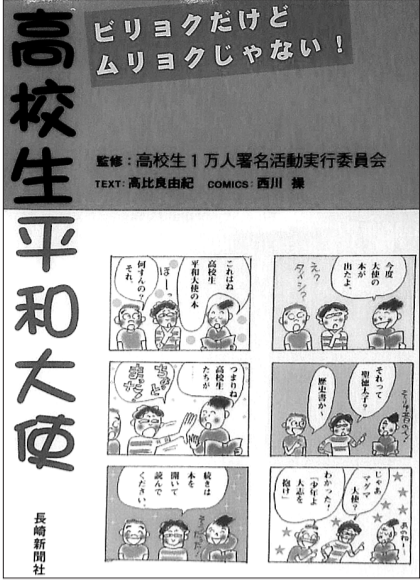
写真は2009年時

今年一月開催の第三八回中央委員会議案書及び九月開催の第八八回定期全国大会議案書に情勢として若干触れてい

るが、七月七日、国連加盟国一九三ヶ国中一二二カ国の賛成をもって「核兵器禁止条約」が採択された。歴史的に見れば、特定兵器の使用、貯蔵、生産、委譲などを全面禁止する条約が多々ある。一九

四九年、ジュネーブ条約における国際人道法を基本とした取り決めに発展させ、単なる戦闘における使用禁止だけでなく、人道的観点から早急に特定兵器を全面禁止し、犠牲者の救済を重視する考え方が基本である。生物兵器(細菌・ウイルス)禁止条約、化学兵器(毒ガス・毒物)禁止条約、近年では一九九九年対人地雷禁止条約、二〇〇八年にはクラスター爆弾禁止条約に

一〇七カ国が採択し、現在は一九九カ国が締結し、日本も締結している。しかし、七月七日、核兵器禁止条約採択に核保有国及び日本は参加しなかった。日本の不参加は、被



2007年に本を出版

私が脱原発運動に駆り出されたころの地域運動家の言葉とよく似ているからだ。「今はとても小さな仲間たちだけど、この闘いから巻町の将来を大きく変える、やがて真の安全を理解する仲間が結果して、歴史を変える」といえば、言っていたなど長崎原水禁大会で思い出させられたので、私が育った町、巻原発三五年の闘いについて、歴史的勝利について、諦めなければ潮目には変わるについて、記載する。

スタートは昭和四四年六月のスクープ記事であった。新潟県巻町(現在、新潟市西蒲区)は、東北電力巻原発計画が地元新聞のスクープにより発覚した。その頃の記憶は全くなく、興味もなく、反原発の諸先輩方が日夜、連絡協議会設置や反対運動を繰り広げていたが、当時は圧倒的な保守基盤であり、町長、町議会議員も賛成多数で占められていたことは言うまでもない。順調にいけば何の問題もなく、議会承認を受け建設準備に入り、町を二分するよう

な闘争になることなど、町民は誰も思っていなかったであろう。昭和四〇年代に原発予定地を観光開発と偽って、過疎化が進む巻町角海浜地区が一気に買収された。当初の相場は坪五〇〇程度だったそうだが、過疎地が坪単価一〇倍まで跳ね上がり、最終的には炉心部近くでは七千円まで跳ね上がったと証言されている。しかし、予定地の中心付近の土地、約三%が未買収地であり、それを後回しにしてきたことが、三〇数年後、建設断念となったことは極めて重大な分岐点であった。

その後、笹口町長は反対派に町有地を売却し、町有地売却無効訴訟が行われたが、平成一五年十二月最高裁は上告不受理、この結果を受け、十二月二十二日、東北電力に巻原発白紙撤回を申し入れた。二十四日クリスマススイブ、東北電力は白紙撤回の素晴らしいプレセントを表明し、翌年二月五日、国に対し東北電力は申請許可を取り下げた。実際に巻原発反対運動は三五年の長きにわたる諸先輩をはじめとする「正しいことは勝つ」で決して諦めない、どこかで潮目は変わる、その言葉が現実になった瞬間であった。

昭和五二年十二月十九日、実際に私が地元の原子力発電建設に関心をもち始めたきっかけは、巻町議会原発誘致決議阻止行動であった。当時はまだ中学三年生、三万人弱の町に早朝から二千人が役場を囲んで決起集会を行い、デモ行進、初めて道路を埋め尽くす行進を見た。今でも印象に残っているが、巻役場は家から走って三分、巻駅からのデモ行進、駅まで一分、ずっとデモ行進に並んで歩いて見ている。この頃は、まだ、原発反対の声は、町の

一般家庭ではタブー視されていた。実はこの前年、巻役場のすぐ前に田舎には似合わない鉄筋の東北電力PR館がオープンしていた。子供にもわかりやすく原子力は夢の発電機みたいな映像やパネルなどがあったと思うが、唯一記憶に残っているのは来場すると、きれいなお姉さんからボールペンを貰えること、当時は小学校の運動会で一等になっても、まだトンボ鉛筆一本ももらって喜んでいる頃であったので、ボールペンが欲しくてかなり頻繁に通って、原発って儲かるんだなって印象を持っていた。実際に巻町長選挙において、昭和のこの時代は原発積極推進派、原発慎重推進派、原発反対派とよく三つ巴選挙となっても、保守二候補陣営で常に接戦を演じているような保守基盤の強い地域で、原発反対なんて言うって、無理があるなと考えていた少年時代であった。

昭和五六年八月、次に衝撃を受けたのが、第一次公開ヒアリング阻止行動であった。すでに新潟市内へ就職して、会社では試用期間中だったの、まだ全港湾には加入していないし、遊び盛りの一八歳の若者に公開ヒアリングなど興味は沸かずなかつたわけだが、一つの検問により脱原発へ変わったのであった。公開ヒアリングは八月二十八日、十日前位からだつたか、新潟県警による巻町へ入場する車両の一斉検問が始まり、町の入り口各所で検問渋滞となっていた。毎日、仕事が終

史の中で、支持政党の違いや行動体制の違い、時には反目しあう中で、総結集は無理な状況であった。そうした状況で、先に町民有志による「住民投票を実施する会」が結成された。この背景には、平成六年の町長選挙において、原発凍結を掲げて連続当選二回の現職町長が三選目立候補で突如積極推進に転じて、知名度を生かし慎重派と反対派を破って当選したことに始まる。この時点で、すでに三%の未買収地は町有地になっており、町長、町議会の動向によって売却可能となっていた。この真切りに根っからの巻っ子による危機感が、みんなの意見を聞いて、自分たちの町の将来は自分たちの意思を反映すべき、それが「住民投票を実施する会」の結成であった。そして、その後すく、先の六団体が結集し、「住民投票で巻原発をとめる六団体連絡会」が結成された。これまで、小規模な複数の共闘会を開催し、唐突に町有地売却をはかろうと画策した。この日は、私も早朝から巻役場へ駆けつけ、役場内へなだれ込み、座り込みを大勢の仲間と行っていた。昼には高校時代のからの馴染みのパン屋のおばちゃんがTVを見て駆けつけ、パンの差し入れを持ってきた。夕方になると座り込みが駆けつける多数の人、差し入れの毛布、座布団、日本酒、伍ビール、これは自分、家に帰れないと覚悟したが、議場への通路を占拠したことにより、町議会議長はじめ多数の町議が議場に入れないことを

理由に流会となった。後から聞いた話では、県警機動隊が警察署に待機し、引き抜きの手法を検討していたそうだが、巻町からの要請は最後まででなかったそう。この時点で電力資本と保守系議員に勝ったと初めて思った。実はこの時点でも、巻町議会は定数二二名中、原発推進保守系二〇名、社会党一名、共産党一名で構成されていた。

平成七年時点で、昭和と比較して巻町はだいぶ様変わりしてきた。新潟市中心部へ三〇キロ弱、昔ながらの生粋の地元保守層だけではなく、新潟市通勤圏として移住してきた子育て世代が明らかに増加してきた。そしてこの年、実行する会は町議会会流の流れを見極め、町議会選挙に勝負に打って出た。「住民投票条例がないなら条例を作るだけの議員を確保しよう」定数二二名に対し、総勢三三名が立候補し、上位当選三名は原発反対を掲げる女性議員であった。実際には激戦の中、奇跡的に二二名中住民投票条例制定派が二二名当選し、過半数を得た。直ちに、条例が制定されると思われたが、現職町長の抵抗により条例案は改悪され、町民の怒りは頂点に達し、直ちに、連絡会と実行する会による町長リコール署名が行われた。私も、署名行動に連日参加したが、公選法に準じているため意外に面倒。直接本人署名をもらわなくて厳密性に因縁をつけられるとのことで、片っ端から各家庭に飛び込んで、今居る人が

その後、笹口町長は反対派に町有地を売却し、町有地売却無効訴訟が行われたが、平成一五年十二月最高裁は上告不受理、この結果を受け、十二月二十二日、東北電力に巻原発白紙撤回を申し入れた。二十四日クリスマススイブ、東北電力は白紙撤回の素晴らしいプレセントを表明し、翌年二月五日、国に対し東北電力は申請許可を取り下げた。実際に巻原発反対運動は三五年の長きにわたる諸先輩をはじめとする「正しいことは勝つ」で決して諦めない、どこかで潮目は変わる、その言葉が現実になった瞬間であった。

平成八年一月、巻町長選が行われ、原発反対・酒屋の親父さんの笹口町長が誕生した。そして、八月四日に日本で初めて住民投票を行うことが決定された。原発の是非は巻町の意見を聞いて、だから住民投票でと云ってから二七年目の勝利であった。この頃、巻町の世帯数は九千軒弱、戸別訪問を繰り返して、賛成派も投票へ行って自分の意思を伝えるべきと訴えかけた。だからあって、町外動員者はある。また、小泉首相時代に有名になった「米百俵」も送られた長岡藩は有名でだが、送った方の三根山藩は巻町だ。今は新潟市と合併したが、山があり海があり、越後平野がある。素晴らしい環境都市であることは今も変わっていない。そんな故郷であり続けることを誇りに思っている。

最後に、記憶の曖昧さ故、巻原子力発電所設置反対会議をはじめとする諸団体の文献を参考に参考したことに、心よりお礼申し上げます。「私たちは、今は微力かもしれないが、決して諦めない」

その後、笹口町長は反対派に町有地を売却し、町有地売却無効訴訟が行われたが、平成一五年十二月最高裁は上告不受理、この結果を受け、十二月二十二日、東北電力に巻原発白紙撤回を申し入れた。二十四日クリスマススイブ、東北電力は白紙撤回の素晴らしいプレセントを表明し、翌年二月五日、国に対し東北電力は申請許可を取り下げた。実際に巻原発反対運動は三五年の長きにわたる諸先輩をはじめとする「正しいことは勝つ」で決して諦めない、どこかで潮目は変わる、その言葉が現実になった瞬間であった。

# 地方版

## 九州 九州北部豪雨支援活動



くさん出てきたので、支部で協議した結果、熊本地震の支援活動に続き、朝倉での支援活動に参加することに決定しました。

今回も業側に協力を要請し、車両の無償の貸し出しなど労使一体の活動となりました。ボランティア活動ですが七月二十四日に第一陣として、

一分会六名で朝七時に支部を出発し朝倉市災害ボランティアセンターに到着。ボランティアの手続きを済ませ現場に向かいました。現場に向かう途中にはたくさんの流木、瓦礫の山、地面に埋もれた車など被害の大きさに驚きました。

二〇一七年七月五日から六日にかけて、福岡県から大分県にかけて観測史上最も多い記録的な雨量を観測し、土砂崩れや増水などにより大きな被害となりました。

まず、今回の九州北部豪雨で被災された方々へお見舞い申し上げます。今回、ニュース等を見て朝倉ボランティアには是非参加したいと言う組合員の意見がた

ちには民家の床下に溜まった土砂を撤去する作業をしました。事前にボランティアセンターの人から作業中に熱中症で倒れた人が多いと聞いていたので、倒れないよう対策

その後も七月二十八日と八月四日に博多支部として支援活動に参加したのですが、今後も被災された方々のために、継続して支援活動を行って行きたいと思えます。(博多支部 濱崎剛史)



## 九州 小倉洞海支部 この一年を振り返って

私を含め四名が九州地方小倉洞海支部に加入して一年が経ちました。

労働組合に加入してはなかった頃は「売上が悪い」「利益が出ていない」などの様々な理由付けでの人員整理や、個々の意見の尊重もされず無理矢理異動させられるなど、全てが会社の言いなりでした。

労働組合に加入したのも、個人の意見は会社には通用しないと気が付き、仲間を守りたい気持ちから始まっており、「安心して働ける職場」を第一に考え日々努力していま



す。その一方で労働組合員として今、国で起きている事を真剣に考え活動しなければいけないと思うのが共謀罪の問

題で、私たち労働者の暮らして、雇用などを守ってくれる法律が守られなくなってしまう。また、相談しただけで罪

になるなど、そのような事があつては決してなりません。労働者の生活と権利を守るために今、私たちにできるこ

と、小さな活動から大きな活動まで、組合員一丸となり一人一人が声を上げ団結し、たと強い意志を身に染みて感じ、熱い思いとなったことを

今でも強く思い出し、団結する仲間、力などまさに労働者になくはならない組織だと思えました。

最後にこれからもしっかりとした目標意識をもち、自分たちの職場を守り、生活の安定を勝ち取り、全港湾労働組合の一員として日々取り組んでいきますのでどうぞ宜しくお願いいたします。(小倉洞海支部 大生康太)

## 東北 東北地方青年婦人部交流集会



七月三日、酒田にて東北地方青年婦人部交流集会を開催しました。いつもは学習会や交流集会に参加する側ですが、今回は開催する側ということで、入念に準備はしたのですが滞りなく予定が進められるか不安な気持ちで当日を迎えました。当日は天候の悪い中各支部から二八名参加していただきました。

まず初めに幹事会が行われ、来賓の方からは「交流集会ということで親睦を深めるのも大事だがメリハリをもって幹事会を行ってください。これからまた暑くなるので各支部に帰ってから体調に注

意して安全な作業を行ってください」と挨拶をいただきました。それから各支部活動報告やフクシマ連帯キャラバンの、青年対策交流会、沖縄平和行進等の報告があり、各支部活発に活動していました。活動について参加した方は各々色々なことを感じていて身になる活動だったと感じました。

これからの活動についても報告があり、統一活動の広島原水禁大会へ送る千羽鶴作成や、統一行動は昨年より決まっていた海の日のゴミ拾いをするのになりました。物販等の提案や団体年金への取り組みの話も出て有意義な話し合いになったと思います。

幹事会終了後、親睦を深めるためにボウリングをしまし

た。初めて組合出張に参加した方も多数いましたが、みなさん暖かい雰囲気、上位入賞者には景品があったこともあり、とても盛り上がったと思います。ボウリング終了後の懇親会では、楽しい話もしながら各地方の現状や組合活動についての熱い話などもあり、さらに距離が縮まったと感じました。最後に、開催支部として支部一丸となって準備段階から頑張ったことで支部の団結強まったと感じましたし、ボウリングや懇親会で他支部との交流が深まったことで横の繋がりが強まり、これからの活動もさらに勢力的にしていけると思いました。(酒田支部 阿部寿明)